

離婚の味

竹森一

離婚の味

竹森一男

昭和三十八年十二月二十五日 印刷
昭和三十九年一月十五日 発行

定価 三三〇円

著者 竹 森 一 男
発行者 豊 島 清 史
印刷者 染 谷 秋 雄

発行所 株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京例〇二三八番
振替東京五六五二六番

乱丁・落丁は御取替いたします。

目 次

赤城

引っ越しそば

第一歩

さらに跳躍

雀の涙

男

女の武器

晴れのち曇り

セ

ニ

元

吾

セ

ル

一七

二三

一流のレストラン

二五

初夏の訪れ

二五

ドライな青年

二七〇

女のあさはかさ

一八六

離愁

二〇三

千客万来

二二三

風

二四三

装幀 勝呂 忠

離婚の味

赤　　城

1

野村江利子^{えり}は、赤城山麓^{さんろく}の温泉旅館、梨木ホテルの萩の間に寝ていた。眼がさめたとき、住み馴れた東京目黒の自宅の寢室ではなく、旅館の一室だと気づいてハッとした。

いつも隣りに寝ていた夫の姿も、もちろん、あるはずはない。野村江利子は、われにかえると腕時計をのぞいた。八時である。微笑して、夜具のなかで思いきり四肢をのばした。すでに、家も夫もない。金井修作の妻金井江利子ではなく、もとの野村江利子にもどって、新しい人生の門に立ったばかりなのだ。

「自由、自由。関係ない、関係ない」

そんなことを呟きながら、起きあがり、浴衣^{ゆかた}の上に丹前をひっかけて、細帯をキリッと結ん

だ。窓をあけると、眼ざめるばかりの紅葉である。

焰と燃えた楓の葉が、細い雨に濡れていた。葉を落した柿の枝に、しぶ柿の実の熟れた色が、雨のしずくにうるおって、つややかに黙々と下っている。江利子は寝起きの澄んだ眼で、晩秋の美しい自然をとらえながら、心の底から思った。

「萌えたつ絢爛の春とはちがつて、パツと紅葉して散る晩秋のきれいな木々のように、わたしも立っているんだわ……」

江利子は窓をあけたまま、思いなおして、キビキビと夜具をたたんだ。これから、ひとりで生きる。十年ちかい結婚生活のシミなんか、きれいさっぱり洗いおとしてわすれよう。娘、野村江利子にかえたんだ。

江利子は、女学生時代によく歌ったシューベルトのセレナーデを、ハミングで口ずさみ、テキパキと押入れのなかへ、夜具をかたづけた。考えてみると、ゆううつな砂を噛むような生活で、ここ数年来は歌をわすれていたのであった。

これからは、ほかからで茶目な性格を、奔放に押しだすことにつとめ、誰はばかることもなく、大声で歌を歌い、わらってやろう。もはや、一人の夫につかえるつつまじやかな妻ではなく、独立して生きる自由な人間として、がんばるんだ。

江利子は、鏡台にむかって、髪をかきあげ、顔面をゆびさきでマッサージしたり、くちびる

の両端を上吊りあげてわらい、沈みこんでいた片頬のエクボを誘いだりして、さいごにペロリと舌をだした。

三十二歳。あの若い潑刺^{はつち}たるツヤや弾力をうしなつて、春の花園からは後退したけれど、成熟した年輪は、秋の紅葉の色香に燃えようとしていた。一雨ごとに、紅葉は沈んだ光彩を放つが、涙で散らすようなことがあつてはならない。

江利子は、床の間の電話器に近づいて、送受器を取った。

「もしもし……おはようございます。わたくし、萩の間の金井……あら、ちがった……野村ですけど、お食事をおねがいますわ。これから、おふろへ行つてきますから、そうね、そのあいだに運んでおいてちょうだい。ええと……」

江利子は躊躇^{ちゆうちよ}した。もはや、誰の世話にもなっていないのだ。女だからといって、小さくする必要はない。男のように堂々と、温泉旅館の朝のムードを楽しんだっていいじゃないか。いや、楽しむべきなのである。

「……待つて！ お銚子を一本つけてきてちょうだいよ。それから、べつに、ゆでたまごを一つね。え？……一人旅ですから、かえつてスタミナが必要なのよ。ほほは」

すこし赤くなつた頬をおさえ、湯道具を持つと活潑に立ちあがつた。

「いいから、いいから……」

弁解するように、そんなことを言った。

野村利江子は、ほろ酔いの幸福感にみちあふれながら、午前九時四十分発のバスに乗った。ひとりで朝酒をのんで旅に出る。こんな経験をしたことは、妻の座に閉じこもっていた十年ちかく、一度もないことだった。

「独立独歩か。わるくない境地ね。ザマア見やがれ。勝手にしやがれ」

そんなことを呟いて、バスの窓から、雨にぬれた山肌の紅葉や、谷底の谿流をながめていると、孤独のゆたかさといったものが、心身に快くひろがってくる思いであった。

離婚が成立して、一切の過去をふりはらい、新しい人生を掴むためのミソギはらいである。ただ飄然として東京を離れ、孤独の山に接したい、と赤城の紅葉をめざしたのだが、一步一步、過去は洗い流されていくようだ。

「効果テキメンみたいよ。雨は、あいにくだったけど、かえって情緒があるようだわ」

梨木温泉入口で、バスを降りた。雨は次第に勢いを増してくるようであった。

利平茶屋行のバスに乗りこむと、客は五、六名で、ガランとしていた。雨のために、観光客らしい人の姿は見えなかった。素朴な地元の人びとである。

利江子は、運転台のすぐうしろの席の夫婦者に眼をとめた。三十五、六歳である。二人はときどき、ボソボソと何か話があったが、新鮮な話題も感動もあるわけはなかった。ただ、夫婦

という馴れ親しんだ生活の年輪が、ずっしりした重みをもって、何げない対話や、沈黙のなかに感じられた。

八、九歳のお河童頭かっぱの少女が、チョコマカと座席のあいだを泳いでいた。どうやら、この夫婦の子どもらしかった。いつか少女は、利江子の席に入りこんで、スヤスヤとねむりこんだ。「無邪気なものね」

と、利江子は横眼で見て微笑した。

少女は、ねがえりを打ち、利江子の肩へよりかかった。赤白の毛糸で編んだトックリ・セーターを着た少女は、かるいイビキ声をたて、ときどきペチャンコの鼻孔から、ハナ提灯はなていとうをふくらましていた。お河童の髪が、利江子の膝の上に垂れた。しかし、夫婦はふりむきもしなかった。

利江子は、モンペ姿の母親の日に焼けた横顔を見た。すこし老けてみえるが、利江子とおなじ年格好である。

「わたしに子どもがあったら、これくらいかしら」

と、利江子は考えた。

夫が他に恋人をつくったくらいで、妻は離婚するだろうか。そのほかに、どんな理由があろうとも、八、九歳のかわいい、自分の腹をいためた子があつたとしたら、齒をくいしばって、

生涯、妻の座に忍従したのではないだろうか。それが、日本の女というものである。

「この母親だって、どんなトラブルがあるかしたたものではない。亭主がイヤでイヤでたまらないのかもしれないのだ。でも、この子のために……と」

そんな想像をめぐらして、利江子は苦笑した。その点、利江子はサバサバしている。子どもができなかったのは、夫のせいであるが、いまとなつては、しあわせだったというほかはない。コブつきの女だったら、と考へてみるだけでもゾツとする。離婚という重ぐるしい地獄をつきぬけたあとは、ひとり身輕に、自由の天地をはばくことができたからである。

「関係ない、関係ない」

利江子は強く頭をふった。

利平茶屋の終点でバスを降りて、ケーブルカーに乗った。肌寒く、客は一人もなかった。利江子は、黒いコートの襟を立て、水玉模様のネッカチーフを頭髮に巻いて、

「ふふふ。まるで、偉い人の貸切りみたいね。ひとりで、すみません」

と、かすかに軋^きんで上昇するケーブルカーの窓から、雑木林の紅葉や、崖のスロープを匍^はう熊笹のしげみを眺めていた。

上昇するにしたがつて雨霽^{もや}が渦巻いてきて、乳色の流れが、ときどき風景を断絶した。ゆたかな孤独の自由が、ふっと心細い感覚にかわって行くようだ。

赤城山頂駅でケーブルカーを降りると、一面に立ちこめた霧が視界をさえぎり、紅葉どころではなく、山々のすがたもさだかではなかった。絶壁にただひとり、おきすてられた人のように、利江子は、しばらく茫然とたたずんでいた。

2

大洞行のバスが来た。ここまで来た以上、ひきかえす気にはなれなかった。バスもまたガラあきで、利江子ひとりをのせると、ゆるく山道を縫いながら、模糊とした乳色の霧のあいだに白樺の林を隠顕させつつ走った。

冷たい風に霧が吹きはらわれた瞬間、白と黒の鮮やかな白樺の幹が眼底にやきついた。何か手さぐりで、未来の霧のなかを進んで行くような心細さである。これは、ほがらかに微笑しながらも、裏に不安をひそめた利江子の心と、似かよった風景でもあった。

「タッタ手切金、三十万円じゃない？　ヘソくりもしないで、まじめに家庭をまもってきたんだもの。わたしの財産は、三十四、五万円ってとこ？　これで、女ひとり、何がやれるの。でも、やってやるわ」

心細さをたちきるように、利江子は遠い眼で、白樺林のかなたをにらんだ。バスはまもなく、冷たい落莫の風景を前に、大洞でとまった。人影もなく、風が吹いている。

眼の前に、ロープウェイの乗場が見えたが、ゴンドラの動いている気配はない。展望台に昇ったところで、全山、乳色の霧にとざされているだけであろう。裸木が寒々と風にゆれ、ここは灰色の初冬であつた。

赤城ロッジの建物が坂下に見え、雨水が流れる小道のかなたに赤城神社の鳥居が霞んでいた。ぼうとけむる一帯の霧の下は、みずうみであろう。歩きたびに、雨水がはね、ハイヒールの底からジーンと冷気が匂いあがつた。

「別れる？」

と、さも愕おどろいたように、ふちなし眼鏡の底から大きな眼をむいて言つた夫の顔が、霧のなかにうかんだ。

「中小企業だが、盛山理研工業の取締役といえは、大した成功だよ。生活には、何の不自由もなくなつたし、子どももないんだ。どんなぜいたくだってできるし、気楽なご身分だと思うんだがね。かえりがおそくなるのは、それだけ重要な仕事をしているからなんだ。それに、女の一人や二人できたつて、きみが本妻であることには、かわりがないんだからな」

「わかれます」

と、利江子はキッパリ言つた。

「あたくしの、する仕事がなくなりました」